

いまだかつて存在したことの無い

民主主義について

ジル・マルチネ

「この論文はジル・マルチネ Gilles Martinet の小冊子「現代のマルクス主義または社会主義の矛盾」中の第三章にあたる部分である。さらに現代の社会主義にかんしてつとんだ論旨を展開している第四章第三次産業革命の社会主義はできたら次号に紹介する。著者のジル・マルチネは、クロード・ブルデラとともにフランスにおけるニューレフトの代表的人物で「フランス・オブザヴァトゥール」(現在「ヌヴォー・オブザバトゥール」)の主筆であり、社、共その他フランスにおけるすべての左翼グループ統一のための世話役をめざす統一社会党 Parti Socialist Unitaire——現在議会に二名の代議士をもつ——の創設者の一人である。このフランスのニュー・レフト・グループは、ドゴール政権の評価をめぐって、現ブルデ一派(「アクション」による)とマルチネ一派に分裂している。フランス・ニュー・レフトについては勝部元「フランスとデンマークのニュー・レフト」経済評論六二年十一月号、海原峻「フランスの新左翼」現代の理論六五年七、八月号を参照されたい——勝部元」

社会主義的民主主義はいまだかつて存在したことがない。

いろいろな国で、社会主義政党は、議会で多数派となり、長期あるいはかなり長期にわたって政府を構成し、いくつかの改良を推進することに、成功をおさめてきた。しかし、これらの国のうち一国として、その社会の資本主義的構造が実際に挑戦を受けたものは、

かつてないのである。

共産党は、まずはじめにロシアで、つぎにはアジアとヨーロッパとの大きな部分で、首尾よく資本主義的構造を破壊し社会主義型の経済組織を設置した。しかし、この組織は、民主主義的形態ではなくて権威主義的形態をとってきた。

われわれにとって、この二つの経験は重要な価値をもっている。われわれはこれらの経験を研究し理解しなければならなかったのである、そのあとではじめて、われわれは社会主義的民主主義の成功の可能性を判断することができ得るであろう。違った考え方をする人々もいる。かれらにとっては、問題の提起は簡単である。すなわち、一方には、社会民主主義の裏切りと共産主義の偏向があり、他方には、前世紀末に社会主義の偉大な理論家たちによって定義されたような「真の」社会主義がある。そして、当然のこととして、われわれがいまやたちもどるべきはこの真の社会主義である、というのだ。

このようなものの見方はまったく誤っており、とりわけこうした熱狂者たちがその意見に従っていると主張する人々——科学的社会主義の創始者たち——の思想とは無関係である、とわたしには思われる。この偉大な理論家たちは、かれらがみずからの分析から描きだした絵がほんの少しでもユートピア的なもので色づけされること

を拒否した。それゆえ、かれらは社会主義社会の作用を細部にわたって説明することを拒否したのであり、そして、それゆえまた、かれらは社会主義社会が「その胎内からそれが生まれでたところの旧社会の母斑」を長いあいだもちつづけるであろうという事実をつねに強調したのである。しかしながら、この自制と慎重さも、かれらがつぎのような多くの仮説をたてることを妨げはしなかった。すなわち、それから半世紀のちの諸経験は、けっしてこれらの仮説を確証しはしなかったのである。そのときから、理論と実践とのあいだのこのタイム・ラグは単にこれらの経験がおこなわれたときの諸条件から説明することができるといふだけのことなのか、それとも、その理論の基礎となった分析のうちのあるものに再考の余地があるのか、という考えが生じるのである。この問いに答えようとせず、マルクスとエンゲルスおよびかれらの直接の後継者たちによってすでに確立された「真理」を繰り返すだけで満足することは、考えるかぎりもつとも非マルクス主義的な態度である。

国家と民主主義とについての社会主義理論の基礎を、できるだけ手短かに想起してみよう。一般に知られているように、この理論は、国家の存在が社会の諸階級への分裂と切り離しがたいものであるという考えを基礎としている。原始社会には国家はない。民族社会にもまだ国家はない。国家が発生したのは、漸進的な分業化、交換の発達、生産物の商品への転化、の論理的結果として、私有財産と相続権が発展したときである。こうして、エンゲルスが書いたように、国家とは「個々人のあたらしく獲得した富を民族制度の共産主義的な伝統に對抗して確保してやるばかりでなく……おこりつつあった社会の諸階級への分裂を永久化するばかりでなく、さらに有産階級による無産階級の搾取の権利と前者の後者に対する支配とを永久化する、制度」であったのだ。

マルクスをエンゲルスは、かれらの歴史的分析を略述して、国家のこの第一の機能——一つの階級の他の階級に対する支配の保護

——には、第二の機能がつけくわえられるべきだということを、明らかにした。すなわち、この第二の機能とは、支配階級のなかのいろいろな党派のあいだの関係を調整することであり、数個の有産階級の存在するところではそれらの両立を保証することである。紀元前五九四年のソロンの改革にただちにひきつづいて、債権者の所有が債務者の所有を救うために犠牲にされたことに、エンゲルスは注目している。あるときは、この特殊的機能が非常に著しい重要性をおびるために、国家が「一般的に」はもつとも強力な階級の機関であるにもかかわらず純然たるそういう機関であることをやめることがある。まさしくそれゆえ、フランスの君主制は貴族階級と新しい中産階級との敵対関係を利用して大きな独立性を獲得することに成功したのであり、第二帝政は土地所有ブルジョアジーを資本所有ブルジョアジーに対抗させた衝突を基礎として自己を樹立したのである。

しかしながら、こうした敵対関係や衝突を調停するにはかならずしも君主制とか独裁制とかによらなければならないとはかぎらない。歴史がくりかえしわれわれに示してきたとおり、関係諸階級のうけいれた枠組みの内部で「平和的で自然的なやり方で」こうした敵対関係や衝突を調整するのに役立つ政体の実例がいくつもある。そうした政体が民主主義と呼ばれる。

かつて民主主義が人民全体の政治であったことはない。いかなるところでも民主主義がみずからの誕生を可能にした社会構造を問題としたことはない。民主主義は、つぎつぎと、奴隷所有者のための民主主義、商人のための民主主義、資本家のための民主主義、であったのだ。まさにこの意味において、マルクスは議会制度を「ブルジョアジーの独裁」の形態の一つとみなしたのであって、ここでは「独裁」という言葉は、その社会学的意味に（一階級の支配として）理解されているのであり、その政治的意味に（権威主義的政治として）理解されているのではない。

マルクス主義の創始者たちは、この一般的な分析から二つの重要な結論をひきだした。第一の結論は人類の遠い未来に関するものである。すなわち、生産がますます社会的性格を増しつづけ、この進展が私有財産の一扫、したがって無階級社会の樹立をもたらす、ということが真実であるとすれば、国家は——ここでは民主主義をも含めて——もはや存在理由をもたず、国家が消滅して、人に対する統治にかわって単なる物の管理がおこなわれるであろう、ということもやはり真実である。第二の結論は資本主義の没落と社会主義のより高い段階とをへだてる長い過渡期に関するものである。すなわち、この時期はなおも、一階級の支配、すなわち——聖句を使えば——一階級の「独裁」、プロレタリアートのそれ、を特徴とするであろう。そして、この独裁が無階級社会の中心に自分自身の消滅の諸条件をつくりだすであろう。

しかし、この「プロレタリアートの独裁」はいかなる形態をとるであろうか。それもまた民主主義の時期と権威主義の時期をもつてあろうか。マルクスとエンゲルスの答えによれば、そうではなくて、「プロレタリアートの独裁」は、歴史が今日までに知ったいかなるものよりもはるかに完全に現実的な民主主義をただちに保証するであろう。こうした無条件的な仮定には説明が必要である。こうして、われわれは、マルクスとエンゲルスをそうした結論にみちびいた諸理由にたちもどらなければならない。しかし、まず、かれらがこのより完全でより現実的な民主主義によってなにを意味したのかを、見てみよう。

パリ・コミューンまでは、かれらも「支配階級としてのプロレタリアートの組織」と「民主主義政体における権力の掌握」については、比較的曖昧な言葉で語った。かれらが明確な言葉で語ったのは、新しい階級の主要な目標、すなわち、私有地の収奪、相続権の廃止、国家の手中への信用の集中化、国有工場の増加、すべての児童の無償教育、等々について述べたときだけであった。

パリ・コミューンのあとで、かれらはさらにおおいに前進することができた。実際のところ、そこでおこったことは、単にフランスの歴史における一つの新しい革命的事件にすぎなかったのではない。それは、社会主義者がそのなかで決定的な役割りを果たすことのできた最初の経験であったのだ。マルクスとエンゲルスは、最初はフランスの同志たちの試みについてはごくひかえめに語り、かれらが多く「ばかげた誤り」を犯すであろうと感じていたのだが、ついにその経験を激しい関心をもって研究するに至った。かれらがそこからひきだした教訓は、ブルジョアジーのうちたてた国家機関は、単に「獲得」されなければならないだけでなく、つぎのような特徴をもつ新しい型の国家に道をゆずるために破壊されなければならない、ということである。

——常備軍を廃止し、それを「武装した人民」でおきかえること。

——「議会ふうの団体ではなくて同時に立法権と執行権をあわせもつ行動する団体となるべき議会」を選出すること。

——すべての官吏は選挙されるべきであり、みずからの行動に対して責任をもち、いつでも解任されうる、という原則を適用すること。

——官吏の俸給と労働者の賃金を等しくすること。

こうして、マルクスとエンゲルスは、パリ・コミューンの短命の計画と暫時の事業から社会主義的民主主義の「諸規準」を決定することができたとあろう、と考えた。（事実、これらの計画と事業の大部分はけっして委託された研究の段階を越えるものではなかった。）こうした大胆な外挿法をやってみることは、もちろん、かれらには気をそそることであった。コミューンの法令は——少なくとも理論的には——永続的な官僚の確立を不可能にした。そうだとすれば明らかに、国家の廃止は権力掌握後ただちにはじまったのである。マルクスとエンゲルスは——それ以外にはまったく経験がなかったのであるから——いったいどうしてここからもっとも樂觀的な

結論をひきださずにおられたらうか。

しかしながら、これらの結論は、国際社会主義運動のなかではわずかな反響しかもたなかった。なぜなら、この運動はしだいにまったく別の型の経験をしつつあったからである。一八八〇年から一九一四年にかけて、ヨーロッパのほとんどすべての国でもアメリカ合衆国や日本やラテンアメリカの数か国でも組織されていた労働者の政党が、選挙で急速な進出を見せた。かつて、ブルジョアジーは土地所有貴族に対する闘争でプロレタリアートに呼びかけた。すなわち、ブルジョアジーは普通選挙権によってプロレタリアートを政治運動にひきいれたのである。そして、いまや、プロレタリアートが与えられた武器をブルジョアジーにむけつつあったのだ。これは権力が民主主義的過程をとおして獲得されうる証拠ではなかったのか。

マルクスは、かれの死——一八八三年——のまえに、この種の論法の背後に看取した「日和見主義的」傾向と戦った。エンゲルスは、この批判を展開し、同時にある程度までそうした突撃のための弾薬の一部をみずから供給した。一八九一年にかれがエルフルト綱領草案のなかで批判したのは、社会主義への平和的進展の可能性についての提案ではなくて、帝国主義ドイツの諸制度がそうした進展を可能にすると考えられているという事実であったのだ。

かれはこう言っている。「一つの絶対的に確実なことは、わが党と労働者階級は民主共和制の形態のもとでしか権力を獲得することができないということである。これは、あの偉大なフランス革命によって示されたようなプロレタリアートの独裁の特有の形態である」。また、かれはさらに詳細にこう言っている。「一七九二年から一七九八年まで、フランスの各県・各市町村自治体はアメリカ型にのっとった完全な自治権をもっていたのであり、それこそまさにわれわれ自身がもたなければならないものである」。したがって、社会主義への平和的進展の途上における現実の障害は、われわれがプロ

シアの伝統やナポレオンの伝統から継承したところの（これらの伝統そのものも君主制的伝統の継承者なのだ）中央集権的・官僚主義的・軍国主義的国家である。ひとたびこの国家が破壊され、ひとたびフランス革命のそれや一九世紀末の合衆国のそれに類似した政治組織が樹立されれば、そのときには、ブルジョアジーの「独裁」からプロレタリアートの「独裁」への交替の諸条件が成熟しているであろう。

それでは、かつては無条件的に決定的なものとみなされていたコミューンの経験はどうなるのか。なるほど！ それは、ひとたびプロレタリアートの勝利が確実となったとき官吏が社会の公僕から主人に変わるのをふせぐ方法を、われわれに示すものである。それは、要するに、これらの公僕は選挙されなければならない、かれらを「いつでも解任する」ことができればならず、かれらの俸給は労働者の得る賃金より高くしてはならない、ということをおわれわれに教えているのだ。

社会民主主義の理論家たちがエンゲルスの晩年の著作からなにを盗みとることができたかが、明らかとなる。かれらは、官僚の反対に對してとるべき処置——かれらが完全にユートピア的だと考えた処置——に関することすべてを用心深くおおいかくし、民主共和制はプロレタリアートの独裁の「特有の形態」でなければならないと述べた有名な文句を証拠に使った。かれらの頭のなかでは、民主共和制は議会主義的共和制を意味したのだ。一九一八年のドイツの敗北後、ヨーロッパ大陸のほとんどあらゆるところでこの型の政体が見られた。こうして、社会主義の諸問題が漸進的・自然的に成熟に達するのを待ちさえすればよかったのだ。カール・カウツキーは一九二五年に、革命は、議会制度の内部で、「平和的に、暴力をとまなうことなく、一步一步を慎重に準備し、資本主義的所有をゆるしつつ、発展するであろう。」と書いたのである。

現実は無残にもこの希望をうちくだった。議会制度の適応性は、

革命にではなくて既成社会秩序に有利に傾いた。実際のところ、議会制度は資本主義のための安全弁として機能する。多くの社会主義者が首尾よくブルジョア議員から議席を獲得しはするが、かれらは議席にとどまるために自分が入れ替った人々と同じ方法を使うのだ。非常にその制度がかれらをも他の者と同じように著名にし、かれらは他の者と同様に社会のいかなる根本的改造をも排除する政治的な定型にはまりこむのである。

それから、社会主義の代議士たちは、非常に好都合にもまれな場合を除けば人民大衆は社会の改造の必要に気づかず、なににもまして物質的条件の当面の改善を望んでいることを、見出すのである。したがって、代議士たちは、国民経済の諸可能性と両立するかぎりにおいて、すなわち資本主義の枠内で生活水準の向上に着手する。

はじめは、かれらもこの仕事を、一時的性質をもつもの、またある程度までは過渡的性質さえもつもの、とみなしている。しかし、のちにはそれが一つの必要となる。そして、組織と教育という自分の目的を一举に完全に放棄したことを忘れるために、われわれの議員たちはますます頻繁に大衆の順応的反應について言及する。ああ！確かにかれらは空想的社会改良家ではなく、堅実に大地に足をつけ、善良な民主主義者のように、選挙民の意志を有りのままに表現するのである——選挙民がブルジョアジーのもつとも悪質なワナにおちいつているときでさえ、選挙民がもっとも悪質な狂信的社会排斥主義をしているときでさえ。

社会民主主義者が前世紀のおわりにとり第一次世界戦争のはじめに公然と主張した方向の「理論的」正当化の一つは、われわれがみてきたように、議会制民主主義の発展のうちにある。しかし、この発展は、エンゲルスが望んだように中央集権国家と官僚との弱化和時をおなじくする、とわれわれはいうことができるであろうか。ドイツ君主制とオーストリア—ハンガリー帝国との没落は、ヨーロッパを一七九二年から一七九八年までのフランスのそれに類似した情

勢のもとに置いたであろうか。そして、ごくしばしば例として使われる合衆国は、一八九〇年代のその超自由主義を維持したであろうか。これらの問題を問うことは、それだけで、これらの問題に答えることになる。一九一四—一九一八年の戦争のあとの議会制民主主義の一時的発展は、事実、国家機関の著しい強化をもなった。それまでは伝統的に「首相」や国家首席の権力平衡を保ってきた議会の権力が、その後は、支配階級の利益と多かれ少なかれ密接に結びつく国家の諸機関と多様な団体勢との力によって均衡を保つことになる。これは明らかにプロレタリアートの独裁の「特有の形態」ではなかった。

社会民主主義者はまた、生産諸力の不断の発展を強調することによって、みずからの政策を正当化した。この発展が資本主義によって促進されたことに疑いはないのだが、しかし、その結果として、社会改造の諸問題は緩慢にしか成熟しなかった。カール・カウツキは、社会主義は「繁栄する資本主義からのみうまれうるものであって、發育不全の資本主義からはうまれえない。」と書いた。まさしくこうしたわけで、かれらの目からすれば、一九一七年一〇月の蜂起は一つの歴史上の偶発事件にすぎなかったものであり、ヨーロッパ社会民主主義の選挙での漸進的進出が真の革命のための基礎をきづいたのである。

一九二九—一九三二年の大経済恐慌は、この政策とこの政策の基礎となった見解とにとって、恐るべき打撃であった。なぜなら、単に「繁栄する資本主義」の経済的刺激が長いあいだ休止しただけでなく、資本主義が恐慌を克服するために、みずからの強化に社会主義への平和的移行の展望をさらにいっそう遠いものにする方法を見出すすべてを心得ていたからでもあるのだ。これらの方法は、それぞれの国で異なっており、政治的にはしばしばまったく対立していた。すなわち、ルーズヴェルトとヒトラーの対立である。しかし、経済的次元では、かれらは多くの共通点をもっている。すなわち、

国家による増大する介入、独占と寡占との発展、伝統的な財政政策の崩壊、公共支出による私的資本の後押し、最後に、それらの支出を軍備に、第二次世界大戦の準備に向けるようにという指令である。

このことは、世界資本主義の大恐慌が社会主義にただの一つの可能性をも提供しなかったということの意味なのか。可能性はたしかに存在した。とりわけフランスとスペインでそうであった。この可能性はフランスでは、それからその結果としてスペインでも失われたが、それは、労働者階級の力がふたたび議会制度という狭い道にむけられ、共産主義者が国際戦略上の諸理由から（スターリンは西欧民主主義諸国との同盟を望んだのだが）社会党のそれに類似した政策をとったからである。人民戦線は、自分自身を改造するのではなくれば持続することはできなかった。すなわち、人民戦線の初期の諸成功の総括が暗示したとおり、人民戦線ははじめに自分自身に定めた限界を越えてゆくべきであったのだ。不意打ちをくらって敗北したブルジョアジーが嵐のとおりすぎるのを待ったために身をひそめたあの短い瞬間こそ、まさしく逆行しえない情勢をつくりだすために決定的な打撃をくわえるべき瞬間であったのだ。しかし、ブルジョアジーは人民戦線のまったなかにもその代表者をもっていたのであって、この人民戦線の漸進的翼は神聖不可侵の議会制民主主義に触れようとはしなかった。それは、上院を尊重さえしたのであり、数か月後には上院によってまんまと絞め殺されることになったのである。

フランスでは、第二次世界戦争直後の時期の経験が一九三六年の経験を確証する。わたしは、左翼諸政党がとった当時の戦術をここで論ずるつもりはない。重要な点は、わたしにはつぎのことであるように思われる。すなわち、これらの政党は、自分が状況を十分に利用して戸口への足掛りを得ることが不可能だと判定するやいなや、資本主義の業務を「正直に執行する」か放逐されるかいずれかを余儀なくされたのである。SFIO^{*}はあまり大した困難もなしに

前者の道を選んだ。共産党も、フランスはソ連邦の同盟国としてとどまるべきだという一つの条件をつけながらも、その例にならおうとした。一九四七年の国際危機はそうした希望をうちくだき、共産党員閣僚は従僕のように即座にお払い箱になった。

* SFIO——労働者インタナショナル・フランス支部、フランス社会党の公式名称。

完全な改造の可能性を提供する情勢が生じうる時期は、非常に短い。あらゆる社会が、脅威を受けている生体のように、非常に敏速に自分自身の防衛手段を分泌しようとする。裂けた組織はいやされ、折れた骨はふたたび癒着する。こうして、革命の戦略は必然的に包囲の戦略を呼びおこす。いく年もいく年ものあいだ、敵の要塞を、征服または破壊する望みもなしに、それは、侵食の戦争である。すなわち、単調で退屈ではあるが、避けることのできない戦争である。それから、ある日、壁の一部がくずれる。いまや、数か月のうちに、あるいは数週間の中にさえ、あらゆることがおこるのだ。きみは、その割れ目を大きくし敵の都市の中心深くつつこむか、途中でとまるか、いずれかだ。後者のばあいには、新しい壁がきづきあげられ、恐ろしい反撃をくわえてくるであろう。新しい援軍が用意されているのに、きみはだまって見守っていなければならぬ。そうなれば、きみは、すっかりはじめからやりなおさなければならぬのだ。

革命政党は、自分に敵対するかもしれない物質的諸力にのみ目を奪われてはならない。慣習や、確立した階級秩序への敬意、伝統的な諸観念の影響力をも考慮に入れねばならない。これらの諸観念は長期間にわたって流布していたのであり、物事の自然的秩序であるかのように思われているのである。ほとんどの人々はこれらの諸観念の歴史的特質、その相互関連性、さらにはその階級的性格にさえも気付いていない。この故に深刻な危機がすべてのことを疑問に投げ入れる。まさにその瞬間に好機を逸することなく決断がなされな

ければならぬのである。そのときには昔からの価値はくつがえされ、そして未来にもたらされるであろうものが一瞬かいま見るのである。しかしひとたび騒乱が過ぎるや水の流れば不可避免的にもとに戻り、そこに止まるだろうと思われていた所さえもこえて逆流する。もしこの瞬間にブルジョアジーによる支配が基礎をおいている政治的構造が未だもとのままにあるならば「復古」の運動は事実上止めがたいであろう。

このことはレーニンが四五年前に「国家と革命」という小冊子の中で主張したことであった。そしてこの分析がレーニンによってなされたというまさにその事実のために、今日においても未だに国際社会主義運動のすべての支部がそれを受入れることを拒むのである。社会主義者はいう「みる、どんな国にレーニンが最後にはなったか。かれは容赦なく議会制を非難したが、しかしその代りにかれが据えつけたものは何だ？ 一方では社会主義社会のユートピア的幻想、そして他方では階級独裁ではなく一つの党の、しかも結局は一人の男の独裁へと必然的に至らしめる政治的組織だ。それならば、たとえ偽瞞的であるとはいえ」「議会主義的方針」に固執した方がより良いのではないか？ というのはそれによればある程度の自由が労働者に確保され、そしてかれらが多くの重要な改良を獲得することができるのだ。」

かかるジレンマが半世紀以上もの間、労働運動の全歴史を支配してきた。どちらもレーニンがブルジョア民主主義について語ったことに一致する。それによれば人は共産主義諸国に行きわたっている政治政策を容認せねばならぬか、あるいはそうでなければ諸政策を否認し、それと同時にレーニンの分析を拒絶して、社会民主主義の日和見主義を容認することとなるのである。

われわれがこのジレンマによって釘付けになっている間は社会主義思想の再興はありえない。レーニンは新しい宗教の予言者ではなかった。かれの著書は「啓示」をうけたものではなかった。そして

根本的には正しい分析の中で、かれの仮説の多くが経験の検証に耐ええずそれ故に今日では放棄されねばならぬ——しかし、プレハーノフ、カウツキー、バウエル、バンデルベルド、あるいはレオン・ブルムのテーゼに戻ってはならないということを述べることは何ら冒とくを行なうものではない。

しかし、レーニンの仮説は、マルクスとエンゲルスがパリ・コミューンの後で自身で主張したところの仮説を単に発展させたものではないのか？ そのことは論ずるまでもない明白なことである。

そしてまた、レーニンは社会民主主義の理論家達によって慎重に無視されたのでない時には、多かれ少なかれ、歪曲されたところの本文の解釈にかれの「国家と革命」の多くの部分を費やしたのではなかったか？ このことは、この論題についてマルクスとエンゲルスが前進させた諸観念を問題とし、研究しはじめなければならぬということの意味するのであろうか。わたしにはそれは自明のことと思われる。コミューン政府の諸布告や布告草案の中に包含されている諸原則を社会主義的民主主義の「規範」へと変えることが可能であると科学的社会主義の創始者達が考えたことについてはすでに示した。今や歴史の光に照らして、かかる外から挿入されたものの中で独断であったすべてのものがみえる。コミューンは社会主義と理解していた。しかしまた、それは同じ程ジャコバンの伝統およびその伝統を信奉する人々によっても支配されていた。立法権と同時に執行権を握るために選出された議會を望んだのはかれらであった。この点に関して、かれらは国民議會（一七九二年九月二十日に始まる革命議會）を参考にしているが、その例は、社会主義の発展のはるか以前のものであるし、そしてまた、その例にはかれら自身の状況に類似したものはほとんどなかったのだ。両方の場合に非常な危険に対して立ち向かうために権力は必然的に強力に集中化せしめられた。また、次のことが指摘されねばならない。すなわち、「委員会」に賛成するという偏向によって、国民議會の外に一種の政

府が再び組織され、それと同様のことがコミューン政府の外でも行なわれた。すべての権力を代表者議会に依譲することはある状況の下では、不可避免的な移行期を安全にすることができるとはいえ、それでも、その制度が永続性をもつこと、さらにはそれが社会主義建設の諸問題にかなうものであることが証明されねばならない。

しかし、疑いもなく、「代議体ではなく行動体である」独立の議会というテーマは、マルクスとエンゲルスの目にはコミューン政府が主張した平等主義的要求ほどの重要性をもたなかった。すなわち、官吏の俸給を労働者のそれと等しいものにする、およびすべての公僕の選挙および罷免の可能性という要求である。カウッキは部分的にのみ正しかったとわたしは考える。私的企業の王国であり、そしてすべての公職の選挙がなされる国である合衆国のイメージが多くの人々の想像を刺激したというのは真実である。しかしこれは単に副次的な要因である。コミューン政府の平等主義の中には、すでにいつの日にかは未来の社会主義都市がそうであろうものが先取りされていたのだ。すなわち、すべての革命におけると同様、一八九一年のパリの反乱ははるかに先んじて、その最も活動的野心的分子の熱望の具体化を企図したのだ。この点よりみればマルクスとエンゲルスの革命的直観はそれらについて思い誤ったものではなかった。しかし、それらの熱望と一九世紀後半におけるフランス社会内部での可能性との間には大きな隔たりがあった。そしてマルクスとエンゲルスが一部分無視したのはこの隔たりであったのだ。それにもかかわらず、同時代すべての近視眼的な政治家達に比べ、かれらは並々ならず先見の明があることを示した。

しかしながら、かれらはその著書の多くにおいてすべての人が社会管理に平等に参加することができるために必要な諸条件を指摘したのであった。それらの諸条件のうちには、「労働の分業に起因する諸個人の奴隸的従属およびそれに伴う精神労働と肉体労働との対立」の消滅が含まれている。しかし、この理論的分析は次のような

ことを示している。すなわち、管理の職務が十分に単純なものとなり、大衆の文化的水準が十分に向上し、労働時間が十分に短縮されてすべての人民が事実上、社会の「直接管理」に参加することができるようになるまではこの奴隸的従属および精神労働と肉体労働の対立の消滅は起らないであろうことを。これらのことが起るまでは「直接管理」は幻想であり幻想しかありえない。

レーニンは異議が唱えられるであろうことを予想した。かれがマルクスとエンゲルスの分析を補足しつつ「国家の管理的諸機能の簡素化」という驚くべき理論を發展させたのはこれに答えるためであった。

かれは著している。「資本主義の発展は……『すべての人々』が国家統治に参加できるように必要な前提をつくりだす。このような前提のうちのあるものは、一連の最も進んだ資本主義諸国ですでに実現されているように読み書きの能力のあることであり、次には、郵便、鉄道、大工場、大規模商業、銀行等々の巨大で複雑な社会化された装置によって幾百万の労働者が『教育と訓練』をうけていることである。

このような経済的前提があれば、資本家と官吏を打倒したのち直ちに二四時間のうちに、生産と分配との統制において、そして、労働と生産物の管理において、かれらの代りに武装した労働者、武装した全人民をもっておきかえることが十分に可能である。

……ここではすべての人民が、武装した労働者より成る国家にやとわれる勤務員に転化する。すべての市民が、一つの全人民的な国家的シンジケートの勤務員および労働者となる。必要なことは、かれらが平等に働き、仕事の分担を規則正しく遂行し、平等の賃金を受けとることである。これらすべてのことを計算し、統制することは資本主義によって極度に単純化され、監督や分類、受領証の発行といったきわめて単純な操作にかえられ、これらすべては、読み書きができ算術の四則計算ができるものなら誰にでもできるものとなっ

ている。」

この文章は、人類の未来を夢みているばく然とした空想家によって作成されたものではない。それは、一九一七年の九月、フィンランドの隠れ家から歴史における最も大規模な運動の一つを指導し、その二か月の中には、ロシア政府の首長となった人によって書かれたものである。そして、それに捧げられるべきであったすべての論説や著書も事実の残酷で容赦のない批判の前ではほとんど価値をもたないであらう。増大しつつある不平等、すでにどう慢さと尊大さにみち、拡大されつつある官僚制、組織化されず、権力からは一層遠ざけられている一般大衆——このようなものがレーニンがかれの死のまぎわの数か月に悲哀と皮肉をもって書きとめた光景であった。その揺ぐことのない名將は未知の陸地に達した最初の者であったのだが、楽しげで健康な岸辺の代りにかれは革命が自分自身を泥で汚しつつ、苦痛をもって前進を続けている沼沢の多い海岸を見出したのだ。

しかもなお、彼の仲間の誰一人としてかれが一九一七年の秋に提言した諸見解を敢えて批判するものはなかった。さらには、きびしい闘争が古いボリシェヴィキ党を分裂させた時にもこの小冊子はいずれもお互いの道しるべであった。「国家と革命」は各国語に翻訳され、諸政策を正当化し、敵を困惑させるために絶え間なく引用される聖書となった。そうした現象は説明理解することができない。

まず最初に、ロシア革命がそのもとで展開された特殊な諸条件を注目したことである。経済的には後進国であり、そこでは数百万の労働者は膨大な農民のただ中に孤立していた。この農民を指導する必要があったが、同時に、巧みに手をうち、かれらからその農産物（すべての蓄積の必然的な基礎である）の多大な部分を取得しなければならぬ。戦争の帰結はおびただしい荒廃をもたらし、技術労働者のほとんどの移住をひきおこした。そして同時に、何時でも武力干渉を支持する用意のある敵意にみちた国際的包囲、かつてレーニ

ンがロシア革命はヨーロッパの他の部分での革命にほんの少し先んじるのみであると考えた時に、かれがなした楽観的な予言を混乱させるに足りないものが、このような状況の中であっただろうか？ いわゆる「戦時共産主義」の時期には闘争の高揚の中で一定の平等主義を確立することは、たしかに可能なことのように思われた。しかし、それは、パリ・コミューンの当時と同様に、包囲された要塞における平等であった。平和が回復されるや、レーニンは賢明にも、退却を命じ、国の現実の状況によりよく適合した秩序を生み出そうとした。NEP（新経済政策）や富農やそして官僚制が一体となって同時に存在したのであった。

時が過ぎ去るにつれて、ただ一人として後にもどることを考えるものではなく、前進のみを考えた。ロシアは徐々に中世から浮び出つつあった。工業化は国中にくまなくゆきわたり、国土のほとんど半分は共同財産となった。一九一七年の望みは再び生まれることとなるのだろうか？ 一般大衆は国家統治において、大きな役割を果たすこととなるのだろうか？ そして官公吏は、かれらがそれまで享受していた政治的諸特権と物質的利益を一挙に手離すのであろうか？ 今やわれわれの知るごとく、現実に進行了た過程は全くその反対であった。社会主義の経済的基礎の建設と同時に労働の報酬の格差は増大し、そしてまた、政治的諸組織のみでなく、全人民をも同様に抑圧する恐怖による統治の制度がうちたてられた。

ソ連の指導者達はこのような展開をどのようにに弁護しえたであろうか？ 恐怖政治の存在を否定することにより、そしてまた、マルクス、エンゲルスおよびレーニンによって予言されたところの国家の死滅を阻むすべてのものは資本主義的包囲からやってくるのだと断言することによってであった。幾十万もの人々、——そしてその中には、中央委員会の大多数のメンバーも含まれていたのだ——は死刑に処せられ、何百万もの人々は流刑に処せられた。すなわち、いかなる異議も、いかなる批判も許容されなかったのだ。しか

も、このことはスターリンが一九三九年三月につきのように宣言することを妨げはしなかった。「国内における圧制の必要は余分なものとなった。いまや、搾取は禁止され、もはや搾取者は存在せず、そしてもはや拘束のうちに止められているものは誰一人としていない故に、それは消滅したのだ」

しかしそれならば、ますます強力となった国家がくまなくはりめぐらされた警察力が警戒の必要性の絶え間ない要求が存するのか？スターリンは答えた。なぜならばわれわれは他国の資本家に対して国を防衛せねばならぬからだ。さらにかれはつけくわえた。「他の国々から切り離され、資本主義諸国によって包囲され、外部からの軍事的脅威にさらされている一つの国における特殊で、個別的な社会主義の勝利の場合においては」未来の社会主義国家の原型についてのマルクス、エンゲルスによる一般的公式を適用することは不可能であると。ソビエト政権をして、しいて「懲罰組織」を存続せしめたのはこの脅威があったからである。そしてもし脅威がなかったならば、これらの組織は消滅し、そして国家は死滅するであろう。では秘かに処刑され、あるいは見世物式の裁判に付せられたのち投獄された反対者たち、かれらについてはどうなのか？それは非常に単純だ。つまり「敵の手先」「帝国主義のスパイ」あるいは「資本主義勢力によってやとわれてサボタージュをしている者ども」というレッテルをかれらに貼りつける。かくて、その理論は安全を保障され、レーニンの小冊子は全世界にくまなく散布され続けるのである。

この偽瞞は——歴史に知られている極悪なものの一つであるが——当然、その犠牲者であってまだ口をきくことのできた人々、まづ主としてレオン・トロツキーによって激烈に非難された。真の「テルミドール」（一七九四年のテルミドールの反動）は一九二五年から一九二七年の間にひきおこされたのであり、ソ連の政治体制は今や「形態において統領政治のそれよりも帝政のそれにより近い

ボナパルティズムの社会的基盤であった。もしこの官僚制がこのボナパルティズムの社会的基盤であった。もしこの官僚制が、進歩的な労働者階級分子の妨害を多少ともたやすく排除しえたとするならば、それは全世界的にプロレタリアートが敗北につぐ敗北をこうむっていたからであり、そして、ソビエト連邦は、資本主義世界によって包囲されていることに気づいていたからだ。この包囲を終るとしよう。そして、ヨーロッパとアジアに新しい勝利の合図がみられるとしよう。その時には、われわれはその後には、もはや無用なものとなるボナパルティズムの組織の崩壊をまのあたりにみることもとなる。単に特殊な歴史的諸条件にその権力を負っているにすぎないところのあの巨大な無用の長物である官僚制は、もはや「ソビエト民主主義の再建」を阻むことはできないであろう。

このように、トロツキーも、異なった方法によってではあるがスターリンと同様の論法を用いたのだ。すなわち、マルクスとレーニンの見通しはまだ有効であり、その実現に対する障害はただロシアの状況とその革命の孤立にのみ由来するというのである。トロツキスト達もまた、平静な気持であの名高い小冊子の配布を続けることができるのだ。

しかしながら、やがて幾つかの異議が唱えられた。共産主義者達の反対は、スターリンが党内において支配権を握っていた一枚岩的な組織に向けられたものではなかった。かれらが討議し、かれらの異なった見解を表明することは可能であった。

そのようにして、トロツキストの数人の者はかれらに指導者と意見を異にするに至ったのだ。かれの意見によれば、官僚制による独裁は「欠陥はあるが、しかし、まぎれもなくプロレタリア人の独裁表現」でありえたのだ。

もし、もはやすでに問題はプロレタリアートの独裁でなかったとしたら、どうなのだろうか？ とかれは自問した。そして、もしその官僚制が単に寄生的組織体ではなくなり、真の階級となってい

るのだったらどうなのだろう？ そうであれば、われわれはマルクスもレーニンもかつて予見したことのない新しい型の社会に直面していると考えてはならないだろうか？ この社会に対してスケッチマンは「官僚制的集産主義」という名称を与え、リッジは「世界の官僚制化」について語り、そしてバーナムはこの後はわれわれ「管理者の時代」に入るのであると宣言することとなる。スケッチマン、リッジ、バーナムはトロツキーに対する反抗において三人ともトロツキストであった。

というのは、トロツキーはしっかりとかれの立場を固守した。官僚制が新しい階級を組成したことを認めることは、社会主義への可能性が存しないということの意味したであろう。初めはトロツキズムの「修正主義者」たちはこの恐ろしい問題を避けようと努めた。かれらは言った。「三つの解答（資本主義・社会主義および官僚制的集産主義）が存するのであり、われわれが今に至るまで考えてきたごとく二つだけではないのだ。その他については何も変わってはいない。」しかし、事実のところすべては変わったのだ。もし官僚制的「階級」がもはやプロレタリアートの独裁における自然的発生物としてみなされないとすると、資本主義社会のただ中にそれが形成されはじめたという見解が受け入れられなければならないかった。

トロツキスト「修正主義者」の関心はその他に、ソ連邦の官僚制とファシズム的諸国家の官僚制およびアメリカの経営者階級との間の一定の類似性に集中せられてきた。かくてかれらの目には、新しい階級の出現は世界的な現象として映り、そしてこの現象は間もなく進歩的なものとみなされるであろうと思われた。「もし、新しい階級が興ったのであれば、それは人類の進歩においてそれが果すべき役割があるからだ」とリッジは書いた。バーナムは断言した。

「経営者社会においては資本主義社会におけるよりも、商品への需要は相当に増大するであろうと信ずるに足る理由が存する。すなわち、より多くの食物、衣服、燃料、そして住宅である。」その時まで

プロレタリアートのものとされてきた歴史的役割を背景に追いやってしまふこれらの諸題目をトロツキーがどのように憎悪をもって拒絶することとなるかをわれわれは理解することができる。

しかもトロツキー自身もかれの晩年においては疑惑に捕えられたのだった。かれはその疑念を第二次世界大戦の発端に、すなわち、正確には、一九三九年九月二五日に発行された論説の中に表明した。そして、私はここにその最も主要な数節を引用することは重要なことであると考ええる。というのは、それらはレーニン主義的教条によって拘束されている論証の諸限界に実に明らかな解決の光を投げかけたのだ。

「もし、われわれが堅く信じているがごとく、この戦争がプロレタリア革命を誘発するとすれば、それはまた、必然的にソ連邦における官僚制の打倒および一九一八年当時におけるそれよりもはるかに高度の経済的文化的基盤にもとづくソビエト民主主義の革新へと至らねばならぬ。その場合には、スターリン主義的官僚制が「階級」であるのか、あるいは、労働者国家における発生物であるのか否かという問題は自動的に解決されるであろう。世界革命の発展の過程において、ソビエト官僚制は単に偶発的な墮落にすぎなかったことが誰の眼にも明らかとなるであろう。」

しかしながら、もし、この当面の戦争が革命ではなく、プロレタリアートの衰退をひきおこすものであるとすれば、今度はもう一つの途が存する。すなわち、独占資本主義の一層の衰退、その国家との一層の融合および未だ民主主義の残存しているところでは、あらゆるところで民主政体の全体主義的政体による置き換えである。

これらの諸条件のもとでは、プロレタリアートにおいて、社会の統制権を自己の手中に掌握することのできない無能力は実際ポナパルティズム的ファシズム的官僚制から新しい搾取階級を発造せしめたのだ。先進資本主義諸国のプロレタリアートが権力を獲得した後、それを保持する能力を持たないことが明らかとなり、そして、

ソ連邦において生じたごとく、その権力を特権的官僚制に移譲する場合には、同様の結果が起るであろう。その時には、官僚主義的墮落の根拠は、国家の後進性に存するのではなく、帝国主義的包囲圏に存するでもなく、支配階級となるには、適していないプロレタリアートの無能力に存するのであることをわれわれは認めざるをえないであろう。そうすると、それにかんがみて、その基本的特質において、現在のソ連邦は国際的な規模における新しい搾取政体の先駆者であることを立証することが必要であろう。」

トロツキーがかれの疑惑を表明する方法は、レーニンおよびかれ自身がかつて抱いたところの社会主義的民主主義の構想に対するかれの愛着を強調している。十月革命の二二年後にも、なお、かれは革命以前に考えられた理論を固守しているのだ。その理論が正しい——そしてそこにおいてその経験が行なわれたそのはなはだしく不利な状況のためにその適用がそこなわれたのか。あるいはその理論が誤っていて、社会主義のさまざまな期待の無益さを認めねばならなくなるからである。トロツキーはかれの進むべき路を見出すことができなかった。かれはこれらの両極端の間に何も見ることができなかった。その理論のある部分は有効であるが、しかしまた、他のものを放棄され、置きかえられねばならぬという考えを一度としてかれが抱いたことはなかった。

しかも、かれの著作の幾つかの個所ではトロツキーは今にも別の解釈をするばかりとなっていたように思われた。たとえば、かれが官僚主義的現象のもととなっている諸原因を列挙しているかれの小冊子「労働者の国家、テルミドールおよびボナパルティズム」（一九三五年発行）の中でかれは経済的に最も先進的である国々さえも含めて、すべての国々でみられる事態について指摘した。実際において、「都市と農村の間の」「人民共和国とその諸部分の間の」（換言すれば、異なった発展の段階にある諸地方間の）「農民の異なったグループ間の」「プロレタリアートの異なった段階の間の」「消

費者の異なったグループ間の」社会的諸矛盾についてかれは語っている。このような諸矛盾が存在しない国がただの一つとして世界にあると誰が主張しえよう？ しかしながら、トロツキーはかれが開いた扉を直ちに閉じてしまった。かれは言った。プロレタリア革命の成功ののち、官僚化への諸傾向は確かに至るところに現われるだろう。しかし、この革命の拡大化とともに社会主義的民主主義に道を譲るためにそれは常に克服されると。

しかし、トロツキーは厳密には「官僚制」という言葉によって何を意味したのだろうか？ かれにとって官僚制は、一貫して次のようなものであった。(1) 国家機関のメンバーの集合体（官僚制の重さはそのメンバーの個人的な収入の総計によってと同様に、そのメンバーの数によって測定されるとかれが言ったのはこの意味においてである。）(2) 「スターリン派」（これはかれにとっては、ソビエトの「ボナパルティズム」の主要な要因であった）(3) 高級官僚と特権的専門家によって構成された官僚制的「カースト」（これから新しい「階級」が発生しうるとかれは一九三九年に述べた）

党の中心部においてと同様に国家の中枢においても明らかとなりつつあった、「官僚主義的諸傾向」にレーニンとトロツキーが注意を奪われていた一九二二年には、かれらはそれらの諸傾向を克服するために政府特別委員会の創設を考慮した。トロツキーは「新しい進路」というタイトルのもとに集められた一連の論文の中で「ここ数年の間に蓄積された諸秩序および行政的手続が党へともたらされた」と述べ一九二四年に（いかなる時にも反対派の組織を認めることはしない）批判の自由の展開がゆるされるべきであり、「現実の事態に適した正しい政策」の絶え間ない追求がなされるべきであることを提案した。一九二六年から一九二七年にかけてスターリンとブハーリンに対し、トロツキー、ジノヴィエフおよびカメネフによる決定的な闘いの行なわれた時、この闘いは、決して一般大衆にまで及ばなかった。すなわち、それはごく少数のみが労働者であ

り、ほとんどすべては、すでに「官僚」であった。ポリシェヴィキ幹部の間にも制限されていたのだ。退けられるか投獄されるかした反対派は、その勝利を得た側の連合もまた、かわって分裂するのではなからうか。そしてそれ故に、かれら自身もその計画を達成するためにその諸党派の一つと提携するべきではなからうということをもまもなく考えていた。(その計画のほとんどは、工業化、富農になした譲歩の取消し、諸幹部の活発化および共産主義インターナショナルに提出さるべき決議案に関するものだった。)そして、この観点より、かれらのうち数人は、最善の同盟者は多分スターリンではないかと考えた。

トロツキーが、その時までソ連邦の内部で闘われていた戦いを基本的に敵対する二つの社会的勢力の闘争として叙述したのはスターリンがブハーリンを切り捨て、一方ではその計画の一部を盗用していながら、左派反対派をうちくだした時の数年後だった。その二つの社会的勢力とはすなわち、一方の側は、その希望が反対派によって表明されているところのプロレタリアートであり、そして、もう一方の側は、権力を握っている人々の利害を代表する官僚制だった。この進展の最後には、一九三九年に疑問がおこった。すなわち、もし官僚制が打倒されえないのだとしたら、これはプロレタリアートは支配階級になる能力をもたないということの意味するのではないだろうか？

戦争および終戦後のもろもろのできごととは、これらすべての理論構成のよろさを証明したのだった。ドイツとイタリアの「ファシズム的官僚制」は打ち負かされた。そして崩壊は資本主義的構造がその社会の根本的構造として残ったことを明白に示した。すなわち、換言すれば、それらの「官僚制」の独裁は単にブルジョアジーによる独裁の別の一形態にすぎなかったのだ。それらの国々が再び議会主義的民主政体になるためには、革命の必要も反革命の必要もなかった(単に軍事的敗北あるのみだ。)中国、ユーゴスラビア、そし

てベトナムにおいて大衆的運動は勝利をおさめた。その一方では、ロシア陸軍は、東欧の数か国において共産党を権力の座におきつつあった。ソビエト「官僚制」は打倒されなかった。しかし、スターリン方式はその創設者の死後は残存しはしなかった。変化が——確かに非常に限定されたものであったが——ロシアに現われた。そして同時に別の変化が——はるかに明らかなものなのだが——ユーゴスラビアに、そして、さらにはポーランドとハンガリーに起った。それはこれらの国々がソビエトのヘゲモニーに抵抗を示した時だった。社会主義的民主主義は未だ実体ではない。しかし、今日われわれは、それがどのような形態をとるかを想像することを可能とするパリ・コミューンのそれよりもはるかに広い経験を有するのだ。これらの諸経験は社会主義的形態の経済組織の下にある諸矛盾を否認すると同時に、それらを握りつづすことを同時に望んだ。必然的に、さらに一層のあいまいさと「形式主義」を認めるであろうが、経済統制の諸問題が民衆の討議の中心となるであろうという意味において、ブルジョアの組織にまさっているであろう政治制度を通して、それがどのように自由に表現されうるかを確かめることが重要である。

(木村満彦訳)